

「蓮根れんの穴を数える子どもたち」

河内地域の平野部は、古来から湖沼が広がる湿地帯でした。そこに蓮が自生していた様子や人々との関わりは、古い記録からうかがい知ることができます。

―クサカエノ イリエノハチス
ハナバチス ミノサカリビト
トモシキロカモ―

「古事記」にみえる赤猪あかいこ子が詠んだ悲恋の歌です。日下江の入り江に咲く蓮のように今が盛りの若い人がうらやましい、という意味ですが、この歌からは、花盛りの蓮の様子が想像できます。

また、蓮の素晴らしさは、清少納言の「枕草子」の中でもたたえられています。

―蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。―
すなわち、蓮の葉は数あるどんな草よりもすぐれて素晴らしい、と表現されています。



蓮根掘り道具
備中鋏ひちゅうさく(右上)・田下駄ひげ(右下)
手鋤てすく(左上)

同じく平安時代の法典「延喜式」えんぎしきには、河内国から蓮を貢進したとあり、すでに河内地方の特産品が蓮であったことが読み取れます。



さらに時代は下って江戸時代、大東市域では諸福村と新田村の庄屋たちが、蓮年貢の免除を願った書状を確認できます。水害によって蓮が腐って年貢を納めることができないうため、百姓たちは年貢を次の年まで待ってほしいと願い出しました。

大東市内の平野部は低湿地帯のため、蓮根栽培には適していましたが、たびたび水害に遭い、当時の人々の暮らしは不安定だったようです。それでも蓮根は米の数倍、収入が望めるため、新田や御領といった平野部では、昭和40年ごろまで盛んに栽培されました。

今となつては、河内全域で見てもごく小規模の蓮根畑を確認できるのみとなりました。

蓮根掘りの道具は、歴史民俗資料館の常設展示室で見ることができます。

(大東市立歴史民俗資料館)